

大学生のQOLに関連する要因の検討 (2)

—専門学校生との比較—

茂原 直樹*・内山 聡**・若松 拓也***・大木 桃代****

Factors which Contribute to the Quality of Life in University Students (2): Comparison with vocational school students

Mohara Naoki, Uchiyama Satoshi, Wakamatsu Takuya & Ohki Momoyo

1. 序論

QOL (Quality of Life) は1960年代、先進国における経済的指標として扱われたことにより、広く知られる概念となった。現在QOLは、医学、老年学、心理学などの分野で幅広く用いられているが、定義は明確ではなく、研究者によって様々である。

QOLの最も定着した訳は「生活の質」であり、もともとは、障害や慢性疾患などによって生活が損なわれている人の、本来の生活水準を回復させるという観点から出てきた概念である(中里, 1995)。しかし、QOLは「人生の質」とも訳されることがあり、人間の病的な側面・ネガティブな側面に着目するだけでは不十分であると言えよう。昨今隆盛してきた健康心理学では、「人間性の病的側面(心理学的病気)ではなく、健康な面(心理学的“健康性”)に注目しよう」(Schultz, 1977 上田訳 1982)というコンセプトがある。この考え方からすれば、特に疾患や障害を抱えていない、一般的な人々をも対象としたQOL研究が行われることが望まれるが、その数はまだあまり多くない。

これまでのQOL研究において、あまり焦点を当てられてこなかった対象のひとつとして、大学生が挙げられる。大学生は年齢も若く、身体的には特に問題を抱えていない比較的健康な人が多いため、中里(1995)が指摘するような従来のQOL概念からすれば、研究対象としては適切ではなかったであろう。しかし、人間の健康的な面にも重きを置こうとする健康心理学的な観点からすれば、大学生のQOLの特徴を明らかにすることには意義があると考えられる。また、大学生は身体的には健康だと考えられるが、心理的な側面においては必ずしも健康だとは言えない。例えば、親からの自立、異性との交際、進路の選択など、複数のライフイベントが重なることで、

* もはら なおき 文教大学人間科学研究科人間科学専攻

** うちやま さとし 文教大学人間科学研究科人間科学専攻

*** わかまつ たくや 文教大学人間科学研究科人間科学専攻

**** おおき ももよ 文教大学人間科学部

危機や葛藤が生じると言われている（白井, 2002）。

このような観点から、若松・内山・茂原・大木（2007）は、大学生を対象にしたQOL研究を行った。その結果、「友人」「両親・兄弟」「仕事（アルバイト）仲間」という身近な対人関係の領域においては、重み付け満足度（現在の重要度と満足度を掛け合わせた値）が高いこと、逆に「外見」「自信」「自立」という個人を形成する要素に関する領域においては、重み付け満足度が低いことが明らかとなった。本研究では、大学生のQOLの特徴をより明確にするため、質問紙調査により専門学校生との比較を行うこととする。

専門学校生は、高等教育機関に属しているという点で大学生と同様であるが、入学時から社会人として働くことを強く意識しているという点では、大学生と質的に異なると考えられる（関口, 1993, 1994, 2001; 永嶋, 2002 など）。

2. 目的

本研究では、専門学校生との比較を通し、大学生のQOLに関連する要因の特徴をより明らかにすることを目的とした。

3. 方法

(1) 調査時期：2006年11月から2006年12月であった。

(2) 調査協力者：関東の2校の私立大学に通う大学生265名（男性85名、女性180名）、および関東の体育系の専門学校に通う専門学校生30名（男性14名、女性16名）を対象とした。専門学校生は、健康、介護、運動の領域を専攻しており、授業は夜間中心で、昼間は実習を兼ねて働いている生徒も多かった。また社会人経験のある学生も約半数いた。

(3) 手続き：大学および専門学校の授業時間内に各教室において質問紙を配布した。回収は調査者に直接手渡すか、学内設置の回収ボックスを用いた。調査は匿名で行われることから、回答すること自体が同意の意思表示とみなされるものとした。また、匿名であるため、通常の同意文書の作成は不可能であることから、同意文書は用いないこととした。

(4) 質問紙：大木・山内・織田（1998）を参考に選定された20領域（健康、自信、価値観、財産、仕事（アルバイト）、仕事（アルバイト）仲間、遊び、学習、創造性、援助、愛情、友人、子ども、両親・兄弟、親戚、住居、隣近所、地域、国家、宗教）、さらに大学生に特徴的であると思われる4領域（恋人・配偶者、自立、外見、インターネット）を付け加えた計24領域から構成されていた。24の生活領域について、それぞれの領域が現在の自分の幸福にどの程度寄与しているか、という「現在の重要度」と、その領域に関する自分の欲求や目的、願望がどの程度満たされているか、という「現在の満足度」、またその領域が将来の自分の幸福にどの程度寄与するか、という「将来の重要度」を問う72項目から成っていた。現在、将来の重要度は「重要でない：0」～「非常に重要：2」の3段階で、満足度は「非常に不満：-3」～「非常に満足：3」の7段階で回答を求めた。なお、各領域について現在の重要度と満足度を掛け合わせたものを

「重み付け満足度」とし、それらの得点を合計したものを「QOL得点」とした。

4. 結果

(1) 現在の重要度

それぞれの領域において「現在の重要度」の平均値を算出し、対応のない t 検定により大学生と専門学校生との間で平均値の差を検討した。その結果、「友人」($t(49.83) = 2.83, p < .01$)、「健康」($t(47.70) = 3.04, p < .01$)、「両親・兄弟」($t(41.98) = 2.69, p < .05$)、「仕事(アルバイト)」($t(290) = 2.06, p < .05$)、「仕事(アルバイト)仲間」($t(290) = 2.25, p < .05$)、「子ども」($t(290) = 2.05, p < .05$)、「親戚」($t(48.11) = 4.43, p < .001$)の7領域において、専門学校生の方が大学生よりも有意に高かった。また「恋人・配偶者」($t(290) = 1.93, p < .10$)において、

表1. 大学生と専門学校生における現在の重要度の平均値・SDと t 検定結果

領域	全体	大学生	専門学校生	t 値	有意差
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)		
友人	1.74 (0.50)	1.72 (0.51)	1.90 (0.31)	2.83	** 大<専
健康	1.67 (0.54)	1.65 (0.55)	1.87 (0.35)	3.04	** 大<専
遊び	1.65 (0.53)	1.64 (0.53)	1.70 (0.47)	0.58	
愛情	1.57 (0.60)	1.58 (0.61)	1.57 (0.57)	0.07	
住居	1.53 (0.59)	1.54 (0.58)	1.43 (0.68)	0.93	
両親・兄弟	1.52 (0.59)	1.49 (0.60)	1.73 (0.45)	2.69	* 大<専
自信	1.52 (0.56)	1.52 (0.57)	1.50 (0.51)	0.16	
学習	1.47 (0.57)	1.48 (0.57)	1.37 (0.62)	1.01	
財産	1.44 (0.60)	1.46 (0.59)	1.30 (0.65)	1.37	
自立	1.41 (0.66)	1.40 (0.67)	1.57 (0.50)	1.68	
インターネット	1.37 (0.64)	1.41 (0.63)	1.03 (0.67)	2.95	** 大>専
価値観	1.37 (0.65)	1.40 (0.65)	1.07 (0.58)	2.97	** 大>専
恋人・配偶者	1.33 (0.73)	1.30 (0.73)	1.57 (0.63)	1.93	+ 大<専
外見	1.29 (0.65)	1.30 (0.65)	1.17 (0.59)	1.16	
創造性	1.25 (0.70)	1.25 (0.72)	1.23 (0.57)	0.13	
仕事	1.20 (0.67)	1.17 (0.69)	1.43 (0.50)	2.06	* 大<専
仕事仲間	1.15 (0.72)	1.12 (0.73)	1.43 (0.63)	2.25	* 大<専
国家	0.99 (0.71)	0.98 (0.72)	1.00 (0.74)	0.11	
地域	0.98 (0.70)	0.97 (0.71)	1.07 (0.69)	0.74	
子ども	0.95 (0.82)	0.91 (0.82)	1.23 (0.73)	2.05	* 大<専
援助	0.94 (0.70)	0.92 (0.72)	1.07 (0.58)	1.06	
親戚	0.77 (0.69)	0.73 (0.70)	1.13 (0.43)	4.43	*** 大<専
隣近所	0.60 (0.65)	0.59 (0.66)	0.77 (0.57)	1.63	
宗教	0.16 (0.44)	0.17 (0.45)	0.07 (0.25)	1.93	+ 大>専

(*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$)

専門学校生の方が有意に高い傾向が見られた。また「インターネット」($t(35.11) = 2.95, p < .01$)、「価値観」($t(37.50) = 2.97, p < .01$)の2領域において、大学生の方が専門学校生よりも有意に高かった。さらに「宗教」($t(52.92) = 1.93, p < .10$)において、大学生の方が有意に高い傾向が見られた(表1)。

(2) 現在の満足度

重要度と同様に、大学生と専門学校生の「現在の満足度」における平均値の差を検討した。その結果、「友人」($t(40.42) = 2.68, p < .05$)、「両親・兄弟」($t(291) = 2.08, p < .05$)、「恋人・配偶者」($t(290) = 2.63, p < .01$)、「外見」($t(291) = 2.45, p < .05$)の4領域において、専門学校生の方が大学生よりも有意に高かった。また「健康」($t(38.43) = 1.79, p < .10$)、「自信」($t(38.60) = 2.01, p < .10$)の2領域において、専門学校生の方が有意に高い傾向が見られた。さらに「財産」

表2. 大学生と専門学校生における現在の満足度の平均値・SDとt検定結果

領 域	全 体	大学生	専門学校生	t値	有意差
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)		
友人	1.41 (1.44)	1.35 (1.46)	1.97 (1.16)	2.68	* 大<専
両親・兄弟	1.16 (1.60)	1.10 (1.60)	1.73 (1.55)	2.08	* 大<専
住居	0.91 (1.55)	0.87 (1.56)	1.27 (1.39)	1.33	
仕事仲間	0.64 (1.68)	0.63 (1.68)	0.77 (1.76)	0.43	
インターネット	0.51 (1.50)	0.54 (1.50)	0.20 (1.45)	1.18	
親戚	0.49 (1.30)	0.46 (1.31)	0.80 (1.22)	1.36	
価値観	0.48 (1.30)	0.51 (1.32)	0.27 (1.11)	0.97	
愛情	0.43 (1.76)	0.38 (1.78)	0.83 (1.58)	1.33	
遊び	0.38 (1.58)	0.36 (1.58)	0.57 (1.59)	0.68	
子ども	0.29 (1.29)	0.31 (1.28)	0.07 (1.26)	1.00	
宗教	0.19 (1.10)	0.22 (1.09)	0.00 (0.79)	1.37	
地域	0.18 (1.44)	0.17 (1.50)	0.27 (0.79)	0.56	
恋人・配偶者	0.08 (1.90)	-0.02 (1.90)	0.93 (1.74)	2.63	** 大<専
援助	0.03 (1.15)	0.05 (1.14)	-0.07 (1.26)	0.51	
健康	0.01 (1.78)	-0.04 (1.79)	0.50 (1.55)	1.79	+ 大<専
隣近所	0.00 (1.29)	0.02 (1.33)	-0.17 (0.91)	0.76	
仕事	-0.25 (1.69)	-0.30 (1.72)	0.13 (1.31)	1.64	
創造性	-0.31 (1.42)	-0.31 (1.47)	-0.30 (0.84)	0.05	
学習	-0.43 (1.51)	-0.45 (1.52)	-0.27 (1.39)	0.62	
財産	-0.50 (1.64)	-0.42 (1.66)	-1.20 (1.22)	3.19	** 大>専
自立	-0.60 (1.58)	-0.64 (1.55)	-0.23 (1.81)	1.33	
国家	-0.70 (1.35)	-0.71 (1.37)	-0.60 (1.19)	0.41	
自信	-0.71 (1.65)	-0.76 (1.67)	-0.20 (1.42)	2.01	+ 大<専
外見	-0.91 (1.47)	-0.98 (1.48)	-0.30 (1.24)	2.45	* 大<専

(** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$)

($t(42.56) = 3.19, p < .01$) の領域において、大学生の方が専門学校生よりも有意に高かった (表2)。

(3) 将来の重要度

同様に、大学生と専門学校生の「将来の重要度」における平均値の差を検討した。その結果、「仕事 (アルバイト) 仲間」($t(40.30) = 2.09, p < .05$)、「親戚」($t(291) = 2.21, p < .05$) の2領域において、専門学校生の方が大学生よりも有意に高かった。また「健康」($t(49.64) = 1.89, p < .10$)、「恋人・配偶者」($t(39.57) = 2.00, p < .10$)、「子ども」($t(43.18) = 1.82, p < .10$) の3領域において、専門学校生の方が有意に高い傾向が見られた。また「価値観」($t(293) = 2.38, p < .05$) において、大学生の方が専門学校生よりも有意に高かった。さらに「インターネット」($t(37.28) = 1.71, p < .10$)、「国家」($t(291) = 1.86, p < .10$) の2領域において、大学生の方が有意に高い傾向が見られた (表3)。

表3. 大学生と専門学校生における将来の重要度の平均値・SDとt検定結果

領域	全体	大学生	専門学校生	t値	有意差
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)		
友人	1.86 (0.37)	1.85 (0.37)	1.87 (0.43)	0.18	
健康	1.84 (0.41)	1.83 (0.42)	1.93 (0.25)	1.89	+ 大<専
自立	1.78 (0.43)	1.79 (0.42)	1.70 (0.47)	1.14	
愛情	1.76 (0.47)	1.75 (0.47)	1.80 (0.48)	0.52	
自信	1.66 (0.52)	1.67 (0.52)	1.53 (0.51)	1.42	
恋人・配偶者	1.63 (0.58)	1.61 (0.59)	1.80 (0.48)	2.00	+ 大<専
住居	1.62 (0.55)	1.63 (0.54)	1.50 (0.63)	1.23	
遊び	1.61 (0.55)	1.61 (0.56)	1.63 (0.49)	0.21	
学習	1.58 (0.54)	1.57 (0.55)	1.67 (0.48)	0.94	
財産	1.58 (0.54)	1.59 (0.54)	1.50 (0.57)	0.84	
両親・兄弟	1.57 (0.57)	1.56 (0.58)	1.70 (0.47)	1.57	
子ども	1.55 (0.64)	1.53 (0.65)	1.70 (0.47)	1.82	+ 大<専
仕事	1.52 (0.62)	1.51 (0.62)	1.57 (0.63)	0.47	
価値観	1.46 (0.63)	1.49 (0.63)	1.20 (0.61)	2.38	* 大>専
インターネット	1.40 (0.62)	1.42 (0.62)	1.23 (0.57)	1.71	+ 大>専
仕事仲間	1.39 (0.70)	1.37 (0.71)	1.60 (0.56)	2.09	* 大<専
創造性	1.38 (0.66)	1.40 (0.66)	1.20 (0.66)	1.58	
外見	1.31 (0.63)	1.32 (0.64)	1.17 (0.53)	1.50	
国家	1.28 (0.67)	1.30 (0.66)	1.07 (0.69)	1.86	+ 大>専
地域	1.25 (0.64)	1.24 (0.65)	1.27 (0.52)	0.19	
援助	1.20 (0.67)	1.20 (0.69)	1.17 (0.46)	0.35	
隣近所	0.99 (0.68)	0.98 (0.69)	1.07 (0.52)	0.66	
親戚	0.95 (0.66)	0.92 (0.67)	1.20 (0.55)	2.21	* 大<専
宗教	0.26 (0.54)	0.26 (0.55)	0.20 (0.48)	0.60	

(* $p < .05$, + $p < .10$)

(4) 重み付け満足度およびQOL得点

上記と同様に、大学生と専門学校生の「重み付け満足度」における平均値の差を検討した。その結果、「友人」($t(288) = 2.49, p < .05$)、「両親・兄弟」($t(291) = 2.64, p < .01$)、「恋人・配偶者」($t(290) = 2.46, p < .05$)、「自信」($t(38.87) = 2.04, p < .05$)、「外見」($t(39.32) = 2.75, p < .01$)の5領域において、専門学校生の方が大学生よりも有意に高かった。また「健康」($t(292) = 1.72, p < .10$)において、専門学校生の方が大学生よりも有意に高い傾向が見られた。さらに「価値観」($t(44.65) = 1.77, p < .10$)、「財産」($t(290) = 1.89, p < .10$)の2領域において、大学生の方が専門学校生よりも有意に高い傾向が見られた。QOL得点 ($t(281) = 1.98, p < .05$) は、専門学校生の方が大学生よりも有意に高かった (表4)。

表4. 大学生と専門学校生における重み付け満足度およびQOL得点の平均値・SDとt検定結果

領域	全体	大学生	専門学校生	t値	有意差
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)		
友人	2.75 (2.62)	2.62 (2.62)	3.87 (2.30)	2.49	* 大<専
両親・兄弟	2.14 (2.78)	2.00 (2.76)	3.40 (2.69)	2.64	** 大<専
住居	1.42 (2.63)	1.35 (2.68)	2.03 (2.14)	1.36	
仕事仲間	1.21 (2.46)	1.16 (2.43)	1.63 (2.68)	1.00	
インターネット	0.94 (2.38)	0.98 (2.42)	0.57 (1.92)	1.08	
愛情	0.85 (3.13)	0.76 (3.17)	1.63 (2.66)	1.44	
価値観	0.82 (2.14)	0.87 (2.20)	0.33 (1.49)	1.77	+ 大>専
親戚	0.76 (1.68)	0.72 (1.63)	1.13 (2.03)	1.28	
遊び	0.71 (2.85)	0.66 (2.86)	1.13 (2.80)	0.87	
恋人・配偶者	0.47 (3.15)	0.32 (3.12)	1.80 (3.11)	2.46	* 大<専
地域	0.32 (1.91)	0.30 (1.96)	0.57 (1.28)	0.74	
子ども	0.26 (1.82)	0.30 (1.80)	-0.10 (1.99)	1.14	
援助	0.15 (1.69)	0.17 (1.69)	-0.03 (1.73)	0.62	
宗教	0.14 (0.70)	0.15 (0.74)	0.03 (0.18)	0.88	
隣近所	0.13 (1.43)	0.14 (1.48)	0.00 (0.95)	0.52	
健康	0.00 (3.16)	-0.11 (3.16)	0.93 (3.02)	1.72	+ 大<専
仕事	-0.33 (2.53)	-0.40 (2.58)	0.30 (1.95)	1.44	
創造性	-0.33 (2.20)	-0.31 (2.27)	-0.50 (1.41)	0.64	
学習	-0.56 (2.59)	-0.58 (2.63)	-0.37 (2.22)	0.44	
国家	-0.71 (2.07)	-0.74 (2.11)	-0.50 (1.61)	0.60	
財産	-0.75 (2.71)	-0.65 (2.76)	-1.63 (2.04)	1.89	+ 大>専
自立	-0.97 (2.64)	-1.03 (2.57)	-0.43 (3.19)	1.18	
自信	-1.10 (2.84)	-1.20 (2.87)	-0.23 (2.42)	2.04	* 大<専
外見	-1.35 (2.34)	-1.46 (2.36)	-0.40 (1.96)	2.75	** 大<専
QOL得点	6.77 (24.64)	5.78 (25.08)	15.17 (18.85)	1.98	* 大<専

(** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$)

5. 考察

(1) 現在の重要度

専門学校生の方が大学生よりも「健康」を重要視していたのは、今回調査を実施した専門学校が、健康・介護・運動に関する技能習得に力を入れている学校であったということが理由の1つだと考えられる。また「仕事（アルバイト）」「仕事（アルバイト）仲間」という仕事に関連した領域において、専門学校生の方が、現在の重要度を高く認識していることが示された。関口（1993, 1994, 2001）の一連の研究によれば、専門学校生は入学時から社会人として働くことを強く意識している。また看護学生を対象とした永嶋（2002）の研究では、専門学校生の方が大学生よりも、将来への看護に対する明確な目標を持っていることが報告されている。将来への高い職業意識の反映として、現在行っている仕事やアルバイトに関しても、高い重要度を感じているのだと考えられる。

さらに専門学校生は大学生に比べ、「友人」「恋人・配偶者」「子ども」「両親・兄弟」「親戚」という、比較的近い人との関係性を重要視していることが示された。このことは、今回調査対象とした専門学校生の中に、社会人経験のある人がいたことが影響している可能性がある。社会の厳しさを知ることにより、安心感を持てる対人関係の重要度をより認識するようになったのだと考えられる。また専門学校生全体のデータ数が少なかったため、このような社会人経験のある人のデータが結果に大きく影響した可能性がある。

「インターネット」「価値観」「宗教」の3領域において、大学生の方が専門学校生よりも重要視していることが示された。「インターネット」については、大学生の方が専門学校生よりも、学習の際にインターネットを用いることが多い（河井, 2003）ため、重要視されているのだと考えられる。

また「価値観」については、内省的になりやすく、自分について考えをめぐらせやすい大学生の特徴が表れた結果であると思われる。さらに「宗教」については、大学生・専門学校生の両方において、24領域の中で最も重要視されていなかった。その中でも専門学校生の重要度が特に低いのは、宗教という抽象的で形の見えない事象に対し、関心が低いからだと考えられる。

(2) 現在の満足度

「友人」「両親・兄弟」「恋人・配偶者」という対人関係の領域において、専門学校生の方が高い満足度を示したことは、重要度とも一致する結果であった。社会を経験することで、親密な人間関係の重要性をより意識するようになったことが反映したのだと思われる。また「友人」については、専門学校の授業や活動がクラス単位で行われていたことから、より充実した友人関係を築きやすかったことも影響している可能性がある。

「健康」に関して専門学校生の方が満足しているという結果は、今回調査対象となった専門学校の主題の一つが健康であるからだと考えられる。この専門学校における調査協力者は日頃から健康を意識しているため、高い満足度を得られているのだと思われる。

「自信」については、専門学校生の方が大学生よりも高い満足度を示した。就職や資格・技術の取得など、比較的目的意識がはっきりしている専門学校生に比べ、大学生はアイデンティティを確立しづらい立場にあると言えるであろう。自己が定まらないため、自信が持ちにくいのだと

考察される。

「外見」については両者ともに低い満足度を示したが、特に大学生においては24領域の中で最も低かった。そもそも青年期は、身体的変化に対する不安を抱く時期であるが（島, 1988）、両者間で差が見られたのは、専門学校生は就職や技術習得への目的意識が明確であり、外見への意識が分散されるためであると考えられる。

大学生は専門学校生よりも「財産」の領域において満足していることが示された。経済的に自立しているとは考えられにくい大学生が、財産について満足しているという結果は、親からの援助や奨学金制度が充実していることに起因していると考えられる。また大部分の大学生が、配偶者や子どもなど、経済的に支えるべき相手がいないため、現在の財産状況に満足している可能性もある。

(3) 将来の重要度

「健康」「恋人・配偶者」「子ども」「仕事（アルバイト）仲間」「親戚」の5領域に関して、専門学校生の方が大学生よりも、将来における重要度を意識していた。「健康」については、専門学校生の専攻の特性上、将来健康に関係する仕事を目指している人も多いであろうことから、妥当な結果だと言えるであろう。

また専門学校生が、将来の生活において対人関係の領域が重要になると考えていることが示された。これは現在の重要度、満足度とも一致する結果で、対人関係の重要性を強く認識していることの表れであると言える。「仕事（アルバイト）仲間」については、就職への意識が高いため、すでに職場での対人関係を念頭に置いているのだと言えよう。また「恋人・配偶者」「子ども」「親戚」については、一生付き合っていく可能性が高い人との関係性を重要視しているのだと思われる。自分の将来像を大学生より現実的・具体的に考えているため、配偶者や子ども、親戚との付き合いが将来的に重要になるであろうことを見据えているのだと考えられる。

「価値観」「国家」について、大学生の方が将来における重要度を高く認識していた結果については、大学生が現実性・具体性のある身近な問題だけでなく、抽象的で形の見えにくい事柄に対しても興味・関心を持っているからだと思われる。先の専門学校生に関する考察と合わせ、具体的で身近なことに重点を置く専門学校生、抽象的で形の見えにくいことに重点を置く大学生という、相反する特性を見出すことが可能である。また「インターネット」に関して、大学生の方が重要視していた。先に述べたように、大学生の方が学習の際にインターネットを用いることが多い（河井, 2003）ため、将来における重要度も高く認識されているのだと考えられる。

(4) 現在の重み付け満足度およびQOL得点

「友人」「両親・兄弟」「恋人・配偶者」「健康」「自信」「外見」の6領域に対して、専門学校生の方が大学生よりも、重み付け満足度が高いことが示された。

「友人」「両親・兄弟」「恋人・配偶者」という、親しい人との関係においては、先にも述べたように、社会人経験の有無が関連していると思われる。また、今回調査対象となった専門学校生が、体育系の専門学校に通っていたことも理由の1つかもしれない。一般に体育系の学生は、対人関係を重要視し、緊密な関係を築きやすいと思われる。そのため、重要度・満足度がともに高く、重み付け満足度も高まったのだと考えられる。

ただし、これら対人関係の領域においては、大学生の重み付け満足度も他の領域に比べて高い

ものであった。大木他（1998）の社会人を対象としたQOL研究と比較してみても、「友人」「両親・兄弟」の領域における重み付け満足度は、社会人とあまり変わらなかった。つまり大学生にとって、親しい人との関係における重み付け満足度は決して低いわけではなく、むしろQOLの上昇に大きく寄与していると言える。

「健康」については、前述のように今回調査対象となった専門学校生の専攻の特性が関与していると考えられる。健康を主題として学んでいるため、重要度も満足度も高い値を示したのだと言える。

「外見」に関しては、大学生の得点が非常に低いことが明らかになった。先に述べたように、就職や技術習得など実際的なことに関心を向ける専門学校生は、外見への意識が分散しやすい。逆に大学生は実際的なことへの目的意識が希薄なため、身体的変化や周りからの視線に過敏になり、不安に陥りやすいのだと思われる。また若松他（2007）は、大学生において女性の方が「外見」の重み付け満足度が低いことを指摘している。本調査では、大学生群における女性の割合が大きかったため、大学生全体の重み付け満足度が低くなりやすかったと考えられる。

「自信」については、明確な目的を持っている専門学校生と、アイデンティティを確立中の大学生との差が表れた結果だと考えられる。「外見」「自信」という2領域に関して、大学生の得点が低いことは、QOL低下の大きな要因となっている。

「価値観」「財産」の2領域に対して、大学生の方が専門学校生よりも、重み付け満足度が高いことが示された。大学生は自分の価値観を重要視することで、個人のアイデンティティ確立を目指しているのだと考えられる。逆に専門学校生は、価値観という形の見えない抽象的なものよりは、より現実的で具体的な事柄に関心があるのだと言える。

「財産」については、専門学校生の重み付け満足度が24領域の中で最も低かった。職業意識が強い専門学校生にとって、経済的な問題は大学生よりも切実であろう。そのため、学費を払わなくてはならない学生という自分の立場に、不満を感じている可能性がある。

QOL得点は、専門学校生の方が大学生よりも高かった。その主な理由として、第一に、「友人」「両親・兄弟」「恋人・配偶者」という近い人との良好な関係性において、専門学校生の方が重み付け満足度が高かったことが挙げられる。ただし上述したように、大学生の重み付け満足度も他の領域に比べれば高かったことから、大学生のQOLに関して、友人、両親・兄弟との良好な関係性は、よい影響を与えていると考えられる。

第二に、「外見」「自信」という個人そのものを形成する要因が、大学生のQOL低下に大きく影響しているという理由が挙げられる。この点が最も注目すべき大学生のQOL特性であろう。

6. 今後の課題

本研究では、調査において大学生と専門学校生を対象としたが、それぞれの専攻分野や社会人経験の有無の特徴が表れてしまった可能性がある。大学生は皆、心理学・社会福祉学・看護学などを専攻とする、いわゆる人間科学系の学生であった。一方専門学校生は、体育系の専門学校に通っており、健康・介護・運動に関して学んでいる学生であった。また社会人経験がある人も少なからずいた。

一般に人間科学系の専攻、特に心理学を学ぶ学生は、比較的内向的で不安傾向が強く、体育系の学生は外向的で健康的であると思われる。また社会人経験のある人は、より現実的な考え方を

しやすくなると考えられる。このような観点から、大学生・専門学校生という立場の要因以外にも、結果に影響を与えた要因がいくつかあった可能性がある。今後は、専攻分野、社会人経験の有無、年齢などの要因をより考慮し、QOLにどのように影響するかを検討することが望まれる。

7. 結論

本研究では、若松他（2007）の先行研究を受け、質問紙調査による専門学校生との比較を通して、大学生のQOLに関連する要因の特徴をより明確にすることを目的とした。その結果、「友人」「両親・兄弟」という近い人との良好な関係性は、大学生のQOLにより影響を与えはするが、専門学校生に比べると寄与度が低いことが示された。また「外見」「自信」という、個人そのものを形成する要因が、大学生のQOL低下に大きく影響していることがより明らかになった。さらに、全体として大学生のQOLが専門学校生よりも低いことが示された。

引用文献

- 河井正隆（2003）. 学習方法にかんする専門学校生と大学生の比較検討 日本教育社会学会大会発表要旨集録, No.55, 170-171.
- 永嶋由理子（2002）. 看護学生の学習意欲の比較検討——専門学校・短期大学・大学の看護学生について——山口県立大学看護学部紀要, 6, 37-44.
- 中里克治（1995）. QOLの構成要因とその測定 日本性格心理学会大会発表論文集, No.4, 6-11.
- 大木桃代・山内真佐子・織田正美（1998）. 日常生活におけるQOL（Quality of Life）に影響を及ぼす要因の検討 早稲田心理学年報, 30, 79-90.
- Schultz, D. (1977). *Growth psychology: Models of the healthy personality*. New York: Van Nostrand Reinhold Company. (シュルツ, D. 上田吉一（監訳）(1982). 健康な人格——人間の可能性と七つのモデル 川島書店)
- 関口 義（1993）. 専門学校生の意識調査——210校、3万人の意識調査結果から——日本教育社会学会大会発表要旨集録, 45, 126-127.
- 関口 義（1994）. 専門学校生の意識調査その2——自由記述欄への回答2024件のまとめ——日本教育社会学会大会発表要旨集録, 46, 32-33.
- 関口 義（2001）. 専門学校生の実態と意識——全国5万2千人の調査結果から——日本教育社会学会大会発表要旨集録, 45, 126-127.
- 島 久洋（1988）. 青年期の容姿と適応感 青年心理学研究, No.2, 12-25.
- 白井利明（2002）. 青年期へのアプローチ 白井利明・都筑学・森陽子 やさしい青年心理学 pp.1-18.
- 若松拓也・内山聡・茂原直樹・大木桃代（2007）. 大学生のQOLに関連する要因の検討（1）生活科学研究（文教大学生生活科学研究所）（印刷中）